

# Little Pot Blues

## リトル・ポット・ブルース<sup>(※)</sup>

鎌倉の隠れ里で密かに割れる、ブルーズな波に想いを馳せる。

文：ジョージ・カックル 写真：李リョウ

ある日、いつもの鎌倉の夏の夕方のこと。風が変わり、ベトベトしていた空気をいくぶんドライにしてくれた。僕はワイフのナオコと息子のブルーと連れだって、評判を耳にしていた小坪の小さなイタリア料理店へと向かっていた。そのころ僕が暮らしていた鎌倉の由比ヶ浜の家からは、その小坪の店までは歩いて20分程度の距離。家から海に出て、材木座を抜け、日本で最古の港の跡といわれる和賀江島を横切り、狭い石段を上がった。そこが小坪の入り口だ。わずか20分の散歩でたどり着いたそこには、こぢんまりとした別世界があった。石段の向こうには椰子の葉がそよぐ逗子マリナーが横たわる。何棟もの白い建物、道の両側に整然と並ぶ椰子の木、そしてヨットハーバー……。そんなリゾートの風景を眺めながら数分ほど歩くと、やがて椰子の木が電信柱に変わる。そこが小坪漁港だ。漁港の交差点の角には、噂に聞いたイタリア料理店ピッコロヴァーゾ。薄暗くなる夕暮れ時には、ネオンの看板が道を赤く照らしはじめる。まるで灯台が道を教えてくれるように看板が光っていた。

ピッコロヴァーゾという名はイタリア語で「小さい壺」という意味なのだそう。そういえば、鎌倉時代、小坪を「小壺」、または「小壺」とも呼んでいたらしい。予約していたのですぐ店に入ると僕がドアに手をかけると、オーナーが中からドアをさっとあ

けた。「いらっやいませ」。その声はちょっと冷たい。席に案内してくれたが、愛想のない顔でメニューを持ってくと、壁にある今日のスペシャルを事務的に読みあげ、さっさとレジのところに戻ってなにか仕事をはじめた。注文を取りにきたときも料理を運んできたときも、その愛想のなさは変わらなかった。不思議な人だなと思いつつも、僕らは会話を楽しんだ。ワイフと友人の話でひとしきり盛りあかっていると、さっきの無愛想なオーナーがいきなり僕らの話に割り込んできて、あたかも旧知の仲のように親しげに会話に加わった。さっきの無愛想さとはまるで別人。昔からの知り合いのように、僕らの友人の名前を口にすることではないか。そう、その店のオーナー堀雅臣は、僕らの会話にずっと耳を傾け、そのなかに出てくる知り合いの名を耳にするので、すぐさまその本人に電話を入れ、僕に関してかなりの探りを入れたらしい。話題にあがっていた友人とは、サーフィンの世界でも有名な写真家、芝田満之のことだった。どうやら芝田本人から友人だということを知りつけ、急に親しみが湧いたのだろうか、それから僕らが店を出るまで、ずっと僕らのテーブルから離れなかった。

小坪はそういう場所だ。こぢんまりとした閉鎖的な環境がそうさせるのか、一見には冷たかったりする。この小さな漁港と目と

鼻の先の小さな湾に崩れるいくつかのポイントブレイクも同様に独特の空気が漂う。それはそこに“所属”しなければ居心地の悪い空気、ちょうどはじめてあのレストランを訪れたとき僕らが感じたような、あの空気だ。

横 須賀から西湘までを貫く国道134号線を、ただ走っても小坪にはたどり着けない。いったん国道を外れ、ほかの道を使うしかそこには行けない。まるでアメリカのルート66のようだと感じた。ルート66沿いには古き良きアメリカの面影を残す街や村が随所に残っているが、それはルート134のおかげで忘れ去られた小坪の姿に似ている。

その昔、源頼朝のガールフレンド、亀の前という名の女性が小坪に住んでいて、頼朝は足しげく彼女の家に通っていた。しかし、鎌倉から小坪へ行くにはとても不便で、それで頼朝は、鎌倉葉山線上の尾根を切り開いて小坪への新たな道をつくるように命じたらしい。それが名越の切り通し、交通の難所だったことから「難越」と呼ばれた道だ。色恋沙汰は道をも通すんだね。いまでも名越の切り通しは人ひとりが通れるほどの狭さだけど、きっと敵が攻めてきてもここで防ぐことができたのだろう。

このように小坪は鎌倉と三浦をつなぐ交通の要衝ではあった

ものの、狭い崖の山道ですれ違うのも大変で、交通の便が悪い秘められた場所(亀の顔を住まわせていた)でもあった。現在の小坪に今も残るそのひっそりとした佇まいには、それ相応の理由が隠されていた。

いまでは小坪に入るには、逗子から入る道と名越から入る道、そして鎌倉の材木座から入る道の3つの行き方がある。小坪に入ると小さな商店街がある。郵便局や八百屋、食堂。そしてピッコロの先は漁港で、海岸には漁師小屋が建ち並び、周辺にはどこにでもありそうなチェーン店やコンビニはなにひとつない。そしてその先は行き止まりで、青い海が広がる。

ピッコロヴァーゾの外に立つと、典型的な日本の漁村とエキゾチックな現代的なリゾートという真逆の世界が同時に目に入る。目の前は逗子マリナー、左に目を向けると小坪漁港。まったく異なる風情のふたつの世界。僕は、アメリカ人の父親と日本人の母親のふたつの世界をもつハーブだから、同じようにふたつの世界がある小坪が好きな理由のひとつなんだ。マリナーには、マンション、ヨットハーバー、プールやテニスコートがあり、結婚式場まである。ここは湘南屈指のリゾートエリア。

一方、小坪漁港は昔ながらの漁師たちの世界だ。漁港の周辺にはほんのわずかな店しかない。ピッコロ、魚市場、そしてリ

小坪には昔ながらの漁師の世界と、エキゾチックなリゾートというふたつの世界があるが、さらに鎌倉から目と鼻の先にあるにも関わらず、ワイルドな未開のジャングルのような世界もある。細いケモノ道を歩いていくと、突然目の前がひらけ、大崎のポイントを一望にできる。サーファーにとっての、夢の道

(※)リトル・ポット・ブルース: 小坪シローの曲のタイトル

ゾートショップ・ネギシという酒屋。酒屋といってもここはいわゆる萬屋で、何年かまえに“リカーショップ”という看板を発注したら、なんと完成した看板には“リゾートショップ・ネギシ”と書かれており、そのままその看板を取りつけたという。この萬屋は明治時代からさまざまな商売を営んできたようだ。現在では小坪の人々の社交場と化しており、日中は漁から帰ってきた漁師たちが、夕方には地元の人たちやサーファーたちが集い、酒を酌み交わし談笑している光景を目にする。

道の向かい側には漁船と漁師小屋が並んでいて、季節によっては直接漁師から新鮮な海の幸を買うことができる。鎌倉時代にはすでに漁師村として鎌倉に魚介類を供給していたといわれる小坪。かつては3,000人もの漁師がここに住んでいて、8人の漕ぎ手が櫓を漕いで三宅島沖までカツオ漁をしていた八艘船まであったらしい。漁師さんから八艘船の話聞いて、僕はハワイのカヌーを思い浮かべた。モロカイチャンネルなどの流れの激しい海峡を8人で力を合わせて漕ぎきったカヌーのように、八艘船で8人の漕ぎ手が力を合わせて黒潮を乗り切り、カツオを追いかけていたという。きっと命を懸けていたんだ。

こんな話も聞いた。この狭い小坪にかつて質屋が7軒あったという。小坪の漁師は宵越しの金を持たない江戸っ子のような気質で、海が荒れて漁に行けなくなると食べるものにも事欠いて質屋に駆け込んだらしい。いったい質屋に何をに入れていたんだろう？ 布団じゃないよね。

また4軒の風呂屋が営業するなど漁師町として栄え、さらに漁場を拡大したいがためになかば強引に逗子まで小坪に編入していた時期があったらしい。ネギシのおやじが言う。「逗子は素通りするから付いた名前だよ。あそこはなんにもなかったんだから。新しく家が建ったから“新宿”って町名になったぐらいだからね」と、“小坪がいちばん”と昔を懐かしんでいた。その後、沿岸漁業が衰退するなか漁師町の小坪も例外ではなく、かつて“鷺ガ浦”と呼ばれた小坪の海岸は、国道134号線のトンネルを造る際に掘った残土で埋め立てられ、逗子マリナができた。地元のシンガー&ソングライター、小坪シローは「港とマリナ、微妙な関係。網とネットじゃ大違い」と歌っている。この歌詞こそ、僕が小坪のことを書こうと思ったきっかけになった。

**僕**は小坪でよくサーフするけど、ローカルではない。小坪の隣町、鎌倉の住人なんだ。でも13年ほどまえ、一時期小坪の住人になったことがある。それまで写真家の横山泰介が

(左下) 小坪漁港から逗子マリナを見る。漁師の世界とリゾートの微妙な関係。(右上) 春の風物詩、ワカメ。風はまだ冷たい。(右中) マリナの両サイドには電柱に代わって椰子の並木。(右中下) 漁港の魚市場には近海の新鮮な魚介類が売っている。真名瀬の漁船も獲れた魚介類をここに卸しに来る。(右下) 刺し網漁が見突き漁、年々漁獲量の減少に半比例して、漁師の年齢は上がる。

典型的な日本の漁村とエキゾチックな現代的なリゾートという真逆の世界が同時に目に入る。目の前は逗子マリナ、左に目を向けると小坪漁港。まったく異なる風情のふたつの世界。



苦虫を噛みしめたような顔の小坪のトレードマーク、ピッコロヴァーゾのマスター

住んでいた古い家屋に、彼が引っ越すというので移り住んだのだ。なにしろ鎌倉と逗子で、海と家のあいだに134号線が通っていない場所は小坪と腰越だけ。ウォーターフロントに建てられたその家は、材木座東端のサーフポイントの目の前にある築85年の古い平屋で、裏山の木を伐採して建てられたそう。そのころ、僕にはブルーが生まれたばかりで、畳のほうに安全だしケミカル素材に対する心配もなく安心だった。ただ冬のすきま風には参ってしまった。引っ越すときに持ってきた部屋の観葉植物もひと冬で寒さのためかすべて枯れてしまったほどだ。

横山泰介はすでに何ヶ月もまえからその家に帰っていない。彼が不在のあいだは、ハワイのレジェンドでウォーターマンのタイガー・エスベリがそこに居候していた。大家のおばさんが僕にこう言った。「最近、横山さんは見かけないけど、入れ墨を入れた大きな外国の方をよく見かけますよ」。もちろんタイガーが居候していることを知っていた僕はちょっととぼけて、「ホントですか？ そんな人は知らないなあ」と答え、その場を切り抜けた。僕ら家族の引っ越しの日。そのタイガーが引っ越し祝いを持って遊びに来てくれた。ひとしきり談笑していると、その大きな笑い声を聞きつけた大家のおばさんが、慌てて僕らのところに駆け寄ってきた。彼女はおもむろにタイガーを指すと「ジョージさん！ この人だよ！ この人！ あの外国人!」。僕はとりつくりうのに大慌て。タイガーもどく吹く風といった様子で空を見上げていたんだ。小坪や鎌倉をこよなく愛した、今は亡きタイガーとの懐かしい思い出のひとつだ。

**小**坪には基本的に4つのポイントがある(白状するけど、僕はポイントのことを書くのは苦手なんだ)。ここに集うサーファーの平均年齢は40歳ぐらいだろうか。集まるサーファーたちの年齢は、ほかのスポットと比べると比較的高い気がするけど、気のせいかな。若い人が集まりにくい、小坪の事情にも理由があるのだろう。まずひとつめは『玉石』ポイント。僕はすぐ近くに2年以上住んでいたが、一度も入ったことはない。鎌倉時代、相模湾の交通量の増加に対応した鎌倉幕府は、それまでは解が

必要だったこの場所に、真鶴半島から玉石を運び和賀江島をつくったとか。これが日本最古の港となった。鎌倉幕府の役人たちもその港の跡がサーフポイントになるとは思ってもいなかっただろうね。波質はチューブを巻く波で速い。僕が最近好んで乗るロングボードにはけっして向かない波。テイクオフ・エリアも狭くて、慣れていなければ楽しくない波だ。しかも滅多に割れない幻のポイント。目の前にゴロゴロしている大きな玉石の浅瀬に向かうホローする波に乗るなんて、少なくとも僕はお断りだ。

そして逗子マリーナの沖にあるポイント『カブネ』。僕は'80年代によく入っていたが、最近が入っていない。ここもまた台風の大きなうねりが入ってこない限り、滅多に割れない。水量が多く、広いフェースのロングウォールがセクションで繋がっていくこの波を、かつてタイガーは「サンセットのようだ」と言っていた。大きくなると流れもきつく、上級者以外のサーファーには危険なポイント。2005年には、『JPSAビッグウェーブ・コンテスト in 逗子』というコンテストが開催され、このポイントの名が全国に知れわたってしまった。ここの常連は、ホクレアの林利夫やダイアナの田中五郎、シェーパーの川南活、葉山の沼田光博たちベテラン勢だから、ここは彼らにまかせておいたほうがいだろう。それに海の出入りにはテトラポッドを歩かなければならないので、重いロングボードを持って歩くと、ボードをボコボコにしてしまう怖れもある。そのうえボードを流せば、材木座まで30分以上泳がなければならないよ。

小坪のサーフスポットは、よくサーフィン誌に“逗子のシークレット”と紹介されているけど、見通しのいい逗子の海岸線にはシークレットと呼べるような隠れた場所はない。いつも、どこだろうって探していた。カブネは鎌倉から見えるし、大崎も葉山から見えるから、シークレットという書き方はあまり意味がないと思っている。

最後は、ライトとレフトのふたつのピークがある『大崎』。僕がいちばん好きなポイントだ。最初、僕は近からレフトに入っていた。アメリカのフォートポイントのときもバックサイドだけど、



“リゾートショップ・ネギシ”の主と看板娘。店内にはいつも笑いが絶えない



(上) サーフィンのセッションがおわると、“リゾートショップ・ネギシ”で2回目のセッションがはじまる。今日もいい一日だった。(下) 大崎のレフトをクルーズする沖津博正



あまり気にしていなかった。入りはじめてしばらくしてから、ライトとレフトの人たちが違うことがわかってきた。レフトはカジュアルで、ライトはみんなピリピリしている。なぜなら、ライトはテイクオフのスポットが小さい。でもレフトは広い。そのポイントに笑える人が多いほうが、フレンドリーなんだ。

ローカリズムというのは、そこに入っているサーファーたちはみんな顔見知りで内輪の空気をかもし出しているから、“一見さん”がエントリーするにはそれなりの覚悟がいる。その辺一帯に漂う空気(アンダーカレント)みたいなものなんだ。まるで、ここにクークス(初心者もふくめて)用の波はないぞ!と暗黙のうちに主張しているかのような重たい空気なんだ。

たとえば、カウンターのある飲み屋。初めて行ったら、最初はカウンターの端の席に座るだろう。いきなり常連さんの席に座ったら、居心地が悪いにきまっている。何度も通ってひとつひとつ常連の席に近づいていくんだ。小坪のポイントも同じ。何回も通って端からだんだんセンターステージに上っていかねばいけぬ。だから、いきなりセンターステージで、「どうだ! うまいだろ!」的に自分の存在をアピールするのは、それだけです。入ってはいけぬことを証明しているようなもの。ポイントにはお互いの存在を認め合い、そこに“所属”していなければ相手にされないといった、独特な空気が漂っている。その空気が、“一見のサーファー”にはどうしても居心地悪く感じられるのかも知れない。

大崎に入りたいけど、ローカリズムが恐いから入れないっていうサーファーがいるけど、入らなければ10年経っても状況は変わらない。入りたかったら、いまからすぐに何回も通って顔見知りになっていくしかないんだ。最初はおこぼれに乗って、だんだんいい波に乗せてもらえるようになる。サーファーなら、そういった基本的なルールをわからなくてはいけぬ。

大崎のライトの波に魅せられて、46年ここでサーフしているのが岡本典彦。かつて、漁協の駐車場の出入り口に駐車したり、漁港の出入り口からパドルするなど、ほんの一部のサーファーたちの無法な振る舞いに怒った小坪漁協が大崎でのサーフィンを制限しようとした。そのとき、岡本はサーファーたちをまとめようと立ち上がった。大崎でサーフィンできなくなったら大変だからね。彼はトラブル回避のためのルールづくりやマナーの徹底、ビーチクリーンなどの活動を率先しておこなってきたんだけど、過去の経緯を知らないサーファーにとっては、彼の存在は煩わしいだろう。でもいまあるのは彼の努力の結果なんだから、リスペクトされて当然なんだ。

大崎にはこんな話もある。'60年代後半にサーフィンをはじめてから現在まで、いままでに乗った波すべてを記録しノートに残しているという逗子のバットマンこと相澤一雄は1967年に初めて大崎のレフトに入った。その日(7月24日)の日記には「ノー



強いオフショアが吹くなか、迫力あるサンセットのようなブレイクをみせる  
サンセット・タイムのカブネ。乗り人知らず

リーシュ、13本乗ってボードを流した」と記し、そしてショートボードに乗り換えた1975年11月23日の日記には「大崎はあまりよくないのがわかった」とも書いている。かつては大崎といえばライトの波をさし、レフトの波はだれも入っていなかった。

大崎レフトはインサイド、アウトサイドの波があって、それから抜けられないクローズアウトの波がある。ある日、見知らぬひとりのサーファーが来て、ボトムターンしたあとフローターでセクションを3回、4回と抜けたんだ。ハワイのケコア・ウエムラだったんだけど、彼は乗っちゃいけない波だとは思っていなかった。彼は混んでいないところを選んだだけなんだ。抜けられるとは思っていないから、だれもサーフしていなかった。僕は初めてフローターという技はセクションを抜けるためにあることを知った。初めて来るサーファーもこのぐらいのことをやってくれば、みんなに挨拶されるんじゃない。

大崎レフトの波はアウトのピークからクルーズし、インサイドのボウルまでメイクできれば、かなりのロングライドができるが、しょせんはうまいサーファーたちだけがこのワイドなロングウォールの楽しさを満喫してしまう。シーガル・サーフショップの河野哲男、かつてロングボードのプロとして活躍していた池田潤、オキツ・サーフボードの沖津博正、そして全日本のシニアとマスターで合計4回優勝している田村誠といったサーファーた

ちが常連だ。彼らが海に入っているとき、僕はいつも彼らのサーフィンを見ている。田村がライディングしているのを見て、すごくいい波だと思って入ったら、最悪のときが多い。また、あいつらに騙されたって思うことがたびたびあった。

この大崎のポイントの目の前に建つ古い寂れたマンションには、かつてタイガーも住んでいたことがある。彼はいつも暖かいコーヒーをつくって海に入るサーファーに飲ませていた。そのとき、僕はなぜ彼が減多に海に入らなくなったのかわからなかったけれど、この歳になって僕も、波を見るだけでもサーフィンを楽しむことがやっとわかってきたんだ。

毎年年末になると、大崎のサーファーたちは忘年会をやるのだけど、ライトとレフトのパーティは別々なんだ。別に仲違いしているわけではないけれど、ここにもなんとなく違った雰囲気か漂っていておもしろい。ライトのパーティは小粋な感じで、イタリアンレストランに集い、サーファーたちはワイン片手におしゃべりに会話を楽しんでいる。それに対して、レフトのパーティは小坪の居酒屋めしやっちゃん。どこかの組合の忘年会といった趣で、サーファーたちだけではなく家族連れで参加していて、子供たちが走り回っている。

いわゆるローカルといっても、小坪で生まれ小坪で育ち小坪

でサーフィンをしているホンモノのローカルは数少ない。小坪の人たちは基本的にはサーフィンをしない。「小坪ではそんな余裕はなかった。とにかく生活が大変だったので、そんな遊びはできなかったよ」とネギシの主、根岸宏治は言う。「海はしょっぱいから私は絶対に入らない」と看板娘で小坪のピョンセ、リエもその言葉につづけた。小坪のローカルといえば、長年サーフしている田中祥資とその弟の利明。それから現在28歳の草柳太郎。彼は17歳から大崎でサーフィンをはじめたローカルサーファー。おそらく大崎でサーフィンをスタートさせた数少ないひとりだ。そのとき「頑張れよ、青年!」と岡本に声をかけられたのが彼の誇り

だという。太郎と同姓(小坪には草柳、一柳という姓が多い)の聡一、尚志、徹の草柳兄弟も、数少ない小坪ローカル。長男の聡一は、小坪の入り口でオーガニックのピッツェリア、自由人処を営んでいる。尚志はライフセーバー、徹は生粋のサーフジャンキー、いまでも大崎の常連だ。

ここの波に魅了され、ここに引き寄せられ住みついてしまったサーファーも少なくない。前述の田村誠もそんなひとりだが、彼はこの春オフィスをそれまでの東京からここ

この大崎のポイントの目の前に建つ古い寂れたマンションには、かつてタイガーも住んでいたことがある。彼はいつも暖かいコーヒーをつくって海に入るサーファーに飲ませていた。

へ移し、小坪をすべての活動の拠点にした。東京で広告デザイナーとして働く佐野弘継は仕事が忙しく連日のように終電になるが、それでも毎日ここへ帰りここの波の音とともに寝起きできる生活がなによりも励みになっているらしい。田村や佐野はときどきネギシの奥で焼酎を飲んでいて、地元の人たちと交流している。ここをリスペクトしてコミュニティとしっかりと絆を結んでいる移住組サーファーがいるから、僕らも小坪でサーフィンできるんだ。でも、ときどき勘違いしている、ローカルになり切れないサーファーも見かけるけどね。

またこんなこともあった。ある日、レフトのラインナップで波待ちをしていると、やけに親しげに微笑みかけてくる女性ボディーボーダーがいた。ずいぶん馴れ馴れしいので、ここの流儀に従い知らんぷりしていると、「ジョージさん、私ですよ…、スタバ!」。なんと彼女は、僕が行きつけのスターバックスで店員をしていた女性だった。鶴沼からここに転居してきた北条紀子。彼女もまた大崎レフトのボウルに魅了されたひとり。以来、僕は彼女を「スタバ」と呼んでいる。

変わり種は、ファッションデザイナーから小坪の漁師に転職した植原和馬だ。それまで東京でファッション関係の仕事に就いていた彼は、いつあがるかわからないここの波を乗りたいがために漁師という道を選んだ。さまざまリスクをかえりみず、人生の大きな選択肢のひとつとして小坪の波を選んだ彼のようなサーファーの存在こそが、ここの魅力的な波の証しなんだね。そんな転居組のサーファーたちも、最初はここの独特な空気の洗礼を受けたい。しかしやがて、次第にその空気に溶け込み、そこに“所属”する術を身につけた彼らは、いまや小坪のひとつの個性と呼んでいいほどこの地に溶け込んでいる。

僕が20年近く住んでいたサンフランシスコから日本に帰ってきた理由のひとつに、「サンフランシスコの波にはもう乗れない」と思ったからだ。そんな想いかられる瞬間が、きっとみんなにもいつかくると思う。昔は波に巻かれると、早くリーシュが切れてくれないかと思ったものだ。大きい波ではリーシュがあることで、ずっと波のなかを引きずられ、なかなか水面に上がることができない。それにリーシュがなくても、自分の力で泳いで帰れる自信もあった。ある日、久しぶりにシスコのダブルの波に入ったとき、僕は思った「もしここでリーシュが切れたら、僕は溺れる」と。あの瞬間だったのかもしれない。僕がサンフランシスコの波をあきらめて、シスコよりは穏やかな波が待つ鎌倉に帰りたと思ったのは…。

そして今、この小坪という、周囲からは忘れ去られたかのような密やかな場所で崩れる波に想いを馳せている。最近、滅多には立たないこの波を待つために、僕は逗子マリーナに部屋を借りた。僕が大好きなアメリカのサーファーでミュージシャンのジミー・パフェットが、かつてこんなことを言っていた「家から自転車で10分走れば、海の前にオフィスがある」。僕もそれに憧れて、逗子マリーナに事務所を構えた。

僕は今、鎌倉に住みながらも、できるだけこの海に入ろうと思っている。でも休みの日に波があるなんてことは稀だ。波がある日は、必ずといっていいくらい仕事だったりする。本当に海にもっと入りたいのならば、自宅からも近い七里ヶ浜や由比ヶ浜に行けばいいんだけどね。それでも僕は、海にも街にもあの“一見さんお断り”の独特な空気が漂うこの小坪で、波が立つのを待っていたい。ピッコロヴァーズでランチをしながらオーナーと語り、ときにはネギシで地元の人たちと酒を酌み交わし、夕焼けを見ながらくだらない冗談を言い合う。確かに“一見”には冷たいけれど、そこに“所属”し、その懐に入ってしまうと、ここほど温かくて心地のよい場所はない。

そんな小坪で、こんなふうによくくりと暮らしているのが、僕はほんとうに好きなんだ。 (文中敬称略)



(上)大崎レギュラー。(中)披露山から望む逗子マリーナと小坪漁港。  
(下)ティビカルな大崎レギュラー

そして今、この小坪という、周囲からは忘れ去られたかのような密やかな場所で崩れる波に想いを馳せている。



## 「小坪を巡る」

文：森下茂男

この記事をつくるために、ジョージと私は、まず小坪を巡ろうということになり、鎌倉と逗子のあいだにひっそりと横たわる小坪に足を踏み入れた。まず飯島崎と呼ばれる鎌倉と逗子との境の急坂を正覚寺へとゆっくり歩みを進める。材木座の海岸が一望できる住吉谷に建つ浄土宗のお寺だ。さらに坂を登っていくと、住吉隧道というトンネルがあった。小坪の背後には鎌倉と逗子を隔てる標高80～100mほどの尾根がつづいている。西の端が飯島崎で東の端が大崎だ。人ひとりほしか通れない狭いトンネルを鎌倉側へ抜けると、眼下には国道134号線が走り、その細い道を崖伝いにさらに行くくと立ち入り禁止の崖で行き止まりになった。扇山と呼ばれるその崖を登ると由比ヶ浜の海岸を一望にすることができた。かつて小坪村へ行くにはこの正覚寺から海前寺までの海沿いの崖の中腹の山道か、鎌倉側の光明寺(浄土宗)の裏山から小坪坂をへて、現在の小坪6丁目にいたる二筋の小坪切り通しがあった。

私たちは一度、正覚寺に戻り、寺の背後の山にある住吉神社をめざした。正覚寺とお墓の脇を通り坂道を登り、さらに苔むした石の階段を40～50段登ると、ちょっとした平らな広場でた。いまは住吉神社になっているが、うっそうとした雑木林に囲まれたこの場所はかつて三浦道寸の住吉城があったが、北条早雲に攻められ、落城したという。

夜陰に乗り、攻め込む北条の軍勢…、そして雲の合間から月の光がもれ、刃がきらりと光り、刀と刀がぶつかる。闇夜に聴こえてくるのは荒い息遣いと、ひたひたと走り去る武士たちの足音…。何人かが白兵戦で傷つき、倒れ、そして三浦道寸はさらに鎧摺へと逃れる。15代つづく三浦一族滅亡のはじまりとなった。この戦ではつぶて石という丸い大きめの石も武器として使われたという。

討つものも討たれるものもかわらけ(※1)よ

裂けて後はもとの土くれ(三浦道寸辞世の句)

私たちは次に海前寺(時宗)に向かった。このお寺は1376年ごろに小坪漁民の念仏道場として建立されたと伝えられている。ここには住吉城での合戦で討ち死にした武將を葬った首塚がある。頭蓋骨や鎧片が出土しており、地元では「お首さま」と呼ばれていたという。その後、昔の集落の面影を残す路地を通して神明宮から小坪寺(浄土宗)、子乃神社、そして地藏堂、須賀神社(小坪天王社)へと巡った。

「こんな小さな地域になんでこんなにたくさんのお寺や神社があるのだろうか?」とジョージが呟いた。その由縁は、小坪村の成り立ちにあるようだ。小坪の名前が初めて日本史に登場するのは、江戸時代に編纂された『吾妻鏡』(※2)だ。そのなかで鎌倉4境として東六浦、南小壺、西稲村、北山内と記され、小坪は鎌倉の南境であった。また同じく江戸時代に書かれた『新編鎌倉志』(※3)には、「小坪村は飯島の東の漁村なり。此浦を鷺浦とも云となん。片濱にて多景の地なり…」と書かれている。

1232年、増えつづける海上輸送の基地として日本で最初の港湾施設、

和賀江島は造られた。和賀江島ができ、交易が盛んになると周辺に紀州の商人たちが住みはじめ、志摩からきた漁師と伊勢からきた船主が協力し、魚介類を出荷しはじめた。こうして小坪村は鎌倉に魚介類を供給する漁師集落として発展し、市として魚座が開設された。さらに新たな漁法とともに日本各地から漁師たちが小坪に移り住むようになり、江戸時代には小坪は戸数311戸、船の数121艘の隆盛を誇る漁師集落になったという記録が風土記に残されている。信仰心の厚い漁師たちは自分たちの村のお寺や神社(鎮守神)を持って移住してきた。その名残は旧小坪村の中心であった浜沿いに出身地ごとの集落となり、鎌倉側から「西町」、「中里町」、「伊勢町」、「南町」の4地区の地名にも表われていた。こうして、小坪には現在でも10以上の神社仏閣があり、信仰の対象となっている。

私たちはお寺・神社巡りの最後に明治時代に建立された村の総鎮守、天照大神社と南町の鎮守である諏訪神社をめざして急坂を登った。その後、眺望が開ける披露山の山頂から逗子マリーナと小坪を見下ろした。小坪の集落と逗子マリーナを隔てる2車線の道路。海側の逗子マリーナは小坪の集落からはまさにとって付けたように浮いていた。山側の一段上がった中腹には小坪の集落があり、自転車やバイクしか通れない細い路地が迷路のように縦横に走っている。そしてマリーナ側に目を戻すと、2車線の道路と椰子並木がきれいに区画を分けている。

もし逗子マリーナがなければ、どういふ景観が広がっていたのだろうか。大正時代の関東大震災では3mの津波がこの浜に押し寄せ、浜置きしていた100艘ほどの船と多くの家が流されたという。そのために現在の集落は3m以上かさ上げして建て直したために、家々の建つ間隔が狭くなり、さらに密集した集落となった。漁師のおじいちゃんの「小坪は不便なところだよ。駐車場さえ見つからないんだから」という言葉が印象的だった。

披露山の名前の由来は、鎌倉時代、將軍への献上品を披露する場所、または担当する役人の在り所があった場所と言われている。ここでは、縄文時代や弥生時代の土器片や漁網で使う土錘(※4)、貝塚や遺跡などが発掘されている。しかし今は、ビバリーヒルズのような高級住宅街が美しく整備され、投資目的で購入したのだろうか、荒れ果てた庭の家も散見できた。ジョージが「こんなに荒れ放題にしておく、アメリカでは告げられるよ。資産価値が下がるからね」と言う。私は三浦道寸の辞世の句を思い出した。隆盛を誇っていてもいつかは滅びるうたかたの夢のように、この豪邸群もまたいずれは土くれに還ってしまうのだろう。いつの世にも変わらないのは、寄せては返す波だけなのである。

大崎のポイントに目を向けると、大潮の影響でインサイドの岩場がすべてむき出しになっていた。その光景はまるでウルワツのようだ。でも違うのは、ここでは月の満ち欠けでは波は立たない。一筋の小さな波がブレイクするポイントにはSUPの団が、お椀に乗った一寸法師のようにパドルの箸を動かしていた。

地勢的に壺、または窪みのように比較的外からは隔絶された小坪は、昔ながらの漁師町と近代的な逗子マリーナが共存し、湘南のなかでも独特な景観が織りなすエリアとなっている。'60年代以降、近海の漁業が衰退しはじめるとともに新たなサーフィン文化が流入し、さらに個性的な色合いを強めていく小坪。その静かな佇まいは、歴史の重さ、ここ独特の“一見さん、お断り”のローカリズムによって、ひっそりと守られている。

(※1)かわらけ:瓦葺と書く。釉薬をかけていない土器(平盃)で、朝廷、神社の祭で使われた。辞世の句は、「討つものも討たれるものも死んでしまえば、割れたかわらけと同様に土に還る」という無常観を詠んでいる。(※2)吾妻鏡:別名東鑑、鎌倉時代に成立した日本の歴史書。全51巻。(※3)新編鎌倉志:水戸光圀が鎌倉を旅したさいの見聞記を元に、1685年に編纂された鎌倉の地誌。全8巻で、小坪村は7巻目に記載されている。(※4)土錘:漁に使う網につけた土のおもり。